

最少耕うん法と土壌水分との関係について

古賀, 茂男
九州大学農学部

古賀, 弥六
九州大学農学部

<https://doi.org/10.15017/14138>

出版情報 : 九州大学農学部農場研究資料. 4, pp.145-146, 1977-06. University Farm, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

最少耕うん法と土壤水分との関係について

古賀茂男・古賀弥六

飼料作物栽培にあたり、作期毎に整地を行わずに2年に1回プラウ耕を行ないながら後の作期は、ハローイングでイタリアン、ソルゴーを栽培した場合の生草の生産量と土壤の乾湿との関係を、昭和46年夏作から同一の畑（新園区7）で継続して実験した。

この実験の中でいえることは、生草の生産量は特に夏作において整地した畑地より低下の傾向があるが、土の乾燥速度は整地したものより早くなり、生育中におけるトラクタ利用による管理作業が順調に行なわれ、特に枕地の土壤凝固防止ができ、作土保全上に有利な場合が多いようである。

昨年（48年）の土壤水分測定結果は、次のようである。

土 壤 水 分

整地法別	土層位別 cm	月 日	1.14	1.26	2.08	2.14	3.21	4.02
		連続降雨日	1.10	1.24	1.29	2.12	3.19	3.30
		降雨量 mm	}	}	}	}	}	}
		降雨日	1.13	1.25	2.07	2.13	3.20	4.01
		連続降雨日	43.9	24.0	94.2	23.2	57.4	27.9
全 耕 区	3~8		53.8	54.0	54.9	62.0	54.4	
(桑園区1)	8~13		53.6	50.7	55.6	59.8	53.5	
最少耕うん区	3~8		52.8	49.5	51.6	53.5	52.5	
(新園区7)	8~13		51.3	50.5	51.9	53.6	50.3	

イタリアンライグラス播種後、収穫までの期間、連続した降雨が20mm以上の場合、降雨20~24時間後に土を採取（3ヶ所）した。採取は表層3cm程度を除外し、3~8、8~13cmの2層位に区分し、105°C熱乾法にて測定した。

2層位間では降雨量の少ない20~30mm程度では、3~8cm土層、8~13cm土層位に土壤水分の差はないが、降雨量の多い50、90mmでは3~8cm土層位で、全耕区がやや多く、最少

耕うん区では差がない。全耕区は3~8cmおよび8~13cm土層ともに最少耕うん区に比べて土壤水分が多く、最少耕うん区の水分の少ないのは、不耕起面に沿って低い方向に排水されたことによるものと思われる。

(昭和50年3月13日)